# 研究部会／活動報告

## （宗教部会）

二〇〇一年十月～二〇〇二年九月

◇二〇〇一年十月九日　研究例会

＊「大谷派教団の差別的教団内身分構造・制度・慣習を問い直す」

レポート　長坂公一さん

・真宗大谷派の宗風について、教団内の身分差別を問うという視点からレポートがなされた。（発表内容については、部落解放研究第八号に掲載されている）

中でも江戸時代なかばに、僧眞詮が書いた真宗大谷派の宗風『稟承餘艸』を押さえながら、いかに真俗二諦の使い分けをしていたかを立証したレポートであった。

◇二〇〇一年十二月十日　公開研究例会

＊「福山藩の被差別部落に対する寺院政策」

講義　中世宗教史専攻　堤　勝義さん

・被差別部落を巡る福山藩の宗教政策は、安芸の広島藩とは異なり、「革田・茶筅・非人」という独特の分裂政策をとっていた。

特に備後に水野氏が入ってからの被差別部落をめぐるとくに寺院との関係について焦点をあてて講義がなされた。今日まで明らかになっている「革田」身分とされた人々の寺院政策の経緯、さらに実態のつかめていない「茶筅」身分とされた人々への寺院政策の今後の解明されるべき課題などが示された。

◇二〇〇二年六月二四日　公開シンポジュウム

＊テーマ「煩悩と差別」
コーディネーター　宗教部会事務局長　小武　正教
パネラー　元龍谷大学学長　信楽　峻麿
宗教部会部長　小森　龍邦

・シンポジュウムの内容は、当・部落解放研究第九号に掲載している。
・シンポジュウムは部落解放研究所宗教部会の呼びかけで同朋三者懇話会など多くの団体の協賛と、個人の呼びかけ人の助力によって「小森龍邦さんの対談を聞く会」として実現したものである。広島別院四階の会場に、一二〇人を超える人が参加した。

◇宗教部会では、現代の社会に訴えていくという企画として、多くの個人、協賛団体を得て、「小森龍邦さんの対談を聞く会」を開催したが、今後年一回程度のシンポジュウムを開いて、内容を公開していく予定である。
「また、いまだに十分明らかになっていない、広島藩・福山藩の被差別部落に対する寺院政策についても、課題として引き続きとりくんでいきたい。
そして、今年「特別対策法」が切れ、目に見えて大きく行政が反動的に方向転換していることに対して、人間主体の確立という面から、いかなるアプローチができるのか、大きな課題として部会で取り組んでいきたい。

## （歴史部会）

今日の日本社会は、右傾化により国民総背番号制度など、人権抑圧の連動した動きをつくり、権力を使って国民を黙らせて疎外状況になじませるような政策が展開されている。戦後、ゼロからスタートして、高度成長経済のかけ声のもと、「消費は美徳」として国内需要の拡張をめざし、公共事業の大判振る舞いで経済を支え、保守政権の延命を図ってきた構図はここにきてつまずいている。今やこれまでの日本経済の矛盾から、大きく裂け目を開けたクレバスに自ら身を投げたのである。このあがきを糊塗するために、米国の意向に沿って、戦争のできる「強い国」を志向し、そのためには反対勢力の押さえ込みが必要だとして、教育の面でも一人ひとりの人権を大切に育てる同和教育をつぶそうとする。最近、人権教育をうたったものの、行政的には教育・啓発の責任だけにして総合的な差別撤廃の施策を持たないまま、国民相互の理解が肝心だと法律でうそぶく。また、マスコミなどを

利用したり、押さえ込んだりして、世論操作によって人々に我慢を強いる環境を作り出している。これは部落問題について言うと、法の失効にともなって、差別をなくする目的のあらゆる人々の取り組みを、行政自らが妨害している現状である。

この流れに沿って、差別と解放の歴史のとらえ方にしても、近年、差別が政治支配の中で具体的に作られていく過程を無視し、政治責任を逃れる口実となる曲学阿世というべき論理が横行し始めている。「村の中の人間関係が固定化した」とか「穢れ意識が古代からあり、それが差別の本質だ。要は観念の切り替えだ」とか、「封建時代にあって、豊かで自由に移動できた」とか、「社会の必然性として中世においての貧富の差から自然的に発生した」等々の、一部を全体に敷衍する誤りとか、ためにする資料集めと論理構築による意図的な動きが起こっている。これらはやがて、差別の発生を仕方のないもの、また、解決できないものととらえさせ、政治の力で解決することを妨害するものとなっていくであろう。

広島部落解放研究所・歴史部会のこれまでの活動・歴史的労作は、これらの問題について実証的な論証によって、重要な問題提起ができるであろう。今後も、広島県内の各地の歴史小論、史料のリスト化に努め、研究者が横につながって成果を交換できる場を設定することを企画したい。

## （教育部会）

教育部会長を承ってから早六ヶ月あまりが経とうとしていまず。その間に私を取り巻く環境も激変し、教育部会長として十分な活動ができていないことを、残念に思っている次第であります。研究所の活動を風化させないためにも、この場をお借りして教育部会長としての基本姿勢を提示し、その姿勢の元に、まずは地道な作業からこつこつと積み上げていくしかないと考えております。

では、まず、私は教育部会長としてどのような姿勢で臨むのか。私の場合、自らの専門が社会調査／社会統計学を基礎とした教育社会学ということもあり、児童・生徒・学生を対象とした様々な統計的データを徹底して分析し、その実態を読み解くという試みを続けて参りました。そして実際に被差別部落の子供たちを含んだ学力や家庭環境・生活実態の総合的な調査にも携わって参りました。こうした営為を通じて、一研究者としての自らの戒めとし、そしてみなさんに訴えかけたいのは、「主張よりも事実」「動かぬ証拠の提示」であります。こうした姿

勢は科学者の基本的な姿勢であり、わたくしは部落解放研究所の教育部会の基本的な方針の一つとしていきたいと思っております。

こうした姿勢は、どうして重要なのでしょうか？例えば、今回論考で小・中学生の学力の実態と被差別部落出身者と一般の生徒の比較を行っていますが、学力は、テストを使えば、かなりはっきりした「数字」という形で把握可能であり、客観的な事実の情報を我々に提供してくれます（もちろんそのテストの妥当性・信頼性が高いという条件で）。問題はこの後です。例えば、国語の学力テストが被差別部落と一般の生徒の間で一〇点の差があったとしましょう。この一〇点という数字は動かぬ事実ですが、この数字をどう解釈するか。ここから先は実は客観的な基準は無きに等しいのです。この数字をもって「まだ格差はある」とも言えるし「この程度なら格差は無くなった」と言うこともできます。ですから何らかの基準を設けて判断せねばなりません。しかし、ここではその点には敢えて踏み込みません。なぜでしょうか。それは言うまでもなく、判断するための「事実」そのものが、十分に調査され把握されているとは言い難いからです。これは過去の研究蓄積を見ても明らかです。これは研究者（私自身を含む）や行政・運動団体の怠慢の部分もありますが、調査活動そのものが年々難しくなってきていることも大きな理由です。

ですが、言い逃ればかりしてもいられません。そこで今年度から当面は、具体的には、過去の児童・生徒・学生に関する実態調査の整理／検討と、過去の調査の再分析を考えております。私自身まだ事情を十分に把握しているとはかぎらず、こうした地道な作業を重ねる上で、みなさまのご協力が必要となります。過去の調査や元になったデータなど、もちろんプライバシーに十分配慮した上で、お寄せいただければ幸いです。行政を動かすためにも、事実の蓄積は重要です。どうぞよろしくお願いいたします。（村澤昌崇）

## （国際部会）

国際部会は、本年度、隔月一度のペースで勉強会を開始した（場所は広島県生涯学習センター）。勉強会は、現代を生きる人間としての思想の涵養をめざし、「日本と世界」に関わるさまざまな話題を採り上げ、参加者で自由で活発な議論を行なおうというものである。具体的に、近代・戦争・アジア・天皇などをめぐる歴史認識の問題や、ポストコロニアリズムや第三世界フェミニズムなど

の歴史思想の問題に対する関心を軸に、折々の話題を設定し、報告を聞いたり、映画を観たり、集会や催しに参加したり、新来のフィリピン人や韓国人と交流したり、史跡を訪ねたりと、多様な方法で真剣かつ楽しく考え、議論するものである。またパレスティナ問題など、講師を招いて小集会を催すことを考えている。

勉強会の第一回は、顔合わせと、研究会の目的・意義について話し合った。第二回は、現代フィリピンの経済と政治を採り上げ、戦争や貧困、差別の問題について学んだ。第三回は一〇月二七日（午後二時～五時）で、日本の日雇労働者の「歴史的原点とアジア」について映画鑑賞をする予定である（参加歓迎）。話し合いの積み重ねの一区切りとして、年度末には、参加者の感想や想いを綴った、手作りの小文集を編みたいと考えている。

部落差別問題をはじめ日本の人権問題が、日本のみならず世界の政治や経済に深く関わっていることは言を俟たない。勉強会の参加者は、それぞれ、そもそもフィリピン人女性の問題や韓国人女性の問題、パレスティナの問題やテロリズムの問題、在日朝鮮人の問題やアイヌの問題、戦争と平和の問題や原爆の問題などの問題意識を抱き、さまざまに考え、学び、行動してきた。これらの参加者が勉強会で人間として出会い、議論をなし、それぞれのかたちで思想を広めることができればいいなと思う。それは結局、部落差別問題をより深い思想的地平において撃つ、そのような力を得ることに繋がろう。

残念にも部落差別問題をはじめ人権状況が悪化の一途を辿っている今日の日本なればこそ、一人ひとりが批判的理性を磨くことが大切であり、そのために草の根の勉強会を積み重ねることが大切であると思う。わが勉強会がその一つのモデル、一つの発信の場となればいいなと思う。